

明治政府も偉かったけど、幕府も捨てたものではない

座談会 御厨 貴×関川夏央×幸田真音

東京人

2

february 2018
no.392
930yen

明治維新
150年

明治を支えた

特集

幕臣・賊軍人士たち



渡沢栄一



福沢諭吉



勝海舟



後藤新平



高橋是清



由利公正

近代資本主義/明六社/長崎・横須賀製鉄所/沼津兵学校
文学・時代小説/西洋医学/日露戦争 ほか

原敬、後藤新平、平田東助……。

かつて「賊軍」として新政府と対立した地から登場した有力政治家たち。その成功の背景には、柔軟かつ未来志向の人材登用構想があった。

復古か、革命か、革新か 勝者の僥倖と 敗者の奮闘。

明

治維新は、英語でどう訳されてきたか。長らくその定訳は Meiji Restoration で

あった。王政「復古」に合わせた訳と思われるが、誤訳の嫌がないではない。では、Meiji Revolution だろうか。しかし官軍と賊軍の別はあるものの、革命というほど社会構造が変わったかといわれると、戸惑いもする。

明治維新の是非については多くの議論があるが、その革新性への評価は疑いがないところだろう。そうすれば、Meiji Innovation といわずとも、Meiji Renovation とするのが適当なように思われる。

では、なにがリノベーションされたのか。最大のポイントは人材であろう。身分や家柄で人生が決まっていた江戸

から、職業選択の自由がある明治へ。

その転換はまさに革新的だった。しかも、それは『坂の上の雲』に代表される清々しさを生みながら、革命特有の荒々しさを持たなかった。限られた人材を有効に活かしていく「処を与える」発想と、次世代を育てていくこうとする未来構想を持っていたからである。

人材登用革命としての明治維新

その発想は維新の冒頭から見られた。新政府の樹立宣言である「王政復古の大号令」は、第一の急務として人材登用を掲げ、能力のある者を積極的に用いる方針を示した。

当然である。薩長という地方政府と、朝廷という有職故実の集団では、全国

清水唯一朗・文

text by Yuichiro Shimizu

しみず ゆいちょう 政治学者。慶應義塾大学教授。1974年長野県生まれ。

2003年慶應義塾大学大学院法学研究科博士課程単位取得。

博士（法学）。専門は日本政治外交論。慶應義塾大学准教授などを経て17年より現職。

著書に『近代日本の官僚』『政党と官僚の近代』ほか多数。

原敬と当時の有力政治家たちが会した写真。前列左から三浦梧楼、高橋は清、後藤新平、伊東巳代治、原敬、犬養毅、末松謙澄、中橋徳五郎、田中義一。後列左から、床次竹二郎、早川千吉郎、臼井哲夫、高橋光成、横田千之助、児玉秀雄、清水辰三郎。大正8（1919）年12月17日、早川邸で撮影。

維新後の日本において、「賊軍」からの人材登用が政界中枢にまで及んだことがわかる（提供・原敬記念館）



政権は動かさない。政権運営が危うければ、仮ごしらえの政府はすぐに崩壊する。知識と経験と展望のある人物を集めなければならない。新政府は各藩の人材に狙いを定めた。

藩の側からすれば大迷惑である。動乱のさなか、限られた人材を政府に奪われてはたまらない。新政府が永続するかもわからなかった。藩政府は主従関係の深さや家族を置き去りにすることの不孝を説いて彼らを引き留めた(佐々木克『志士と官僚』講談社)。この段階で政府に集ったのは、由利公正(三岡八郎、越前)や伊藤俊輔(博文、長州)、大隈八太郎(重信、肥前)のように、溢れ出す意欲と野望に燃え、故郷を捨てても維新に飛び込むことのできた青年

たちであつた。

有栖川宮熾仁親王が率いる征東軍が順調に進軍を続け、政権交代が自明のものとなると、状況は一変する。慶応四(一八六八)年三月十四日、新政府は五箇条の御誓文を発する。

- 一、廣く會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ
- 一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
- 一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス
- 一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
- 一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

よく知られているのは政治体制のありようを示した第一項だろう。しかし、注目すべきはその後である。第二項は挙国一致による発展を説き、第三項はその目的を達成するためにすべての人々が夢を持ち、実現できる世の中を作るという理想を掲げる。そのために旧習を破り(四項)、世界に知識を求めること(五項)が説かれた。

三月十四日といえば、勝海舟と西郷隆盛による江戸無血開城に向けた会談が行われている最中である。身分に縛られた徳川政権から、自由と努力を尊ぶ新政府へ。御誓文は時代の転換を象徴するだけでなく、旧秩序のなかにあった人々に夢を抱かせる魅惑のステートメントであった。

新政府に求められた旧幕臣たち

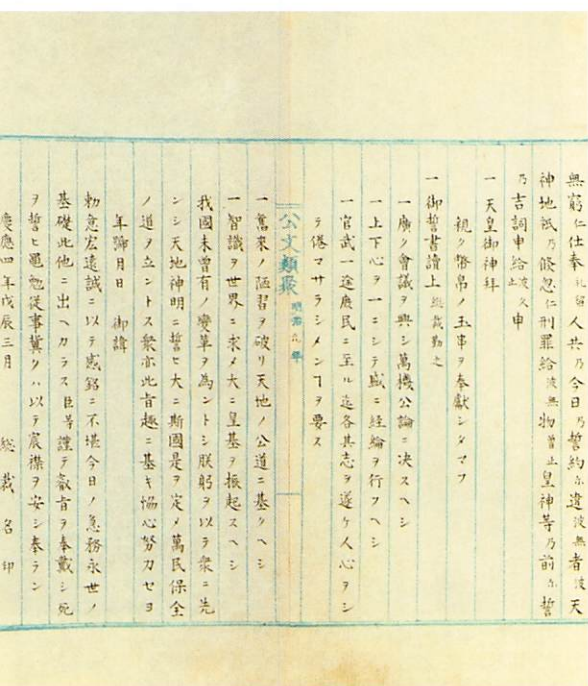
すなわち、その目的は国内の人材に新政府への参加を促すことにあつた。薩長をはじめ雄藩の志士たちは、志は高かったが、専門的な教育を十分に受けてはいない。江戸で剣術修行をした腕利きは多くとも、漢学の昌平坂学問所や洋学の開成所に学んだ者はわずかであった。なにより彼らは藩政の経験こそあれ、全国政権を動かしたことはない。彼らが政治家として君臨しても、実務を担う知識と経験を持った人

材がなければ、統治を行うことはできない。

その任に応えうるのは旧幕臣を措いてほかにない。慶喜の謹慎を受けて、徳川宗家も旧幕臣の新政府出仕を認め、実に五千人あまりが静岡に移らずに新政府の「朝臣」となった(門松秀樹『明治維新と幕臣』中央公論新社)。

もつとも、この段階では新政府からの誘いを断る旧幕臣も多かった。彼らには変心を潔しとしない誇りと、宗家の行く末を案じる心情があつた。なにより、東北で新政府軍と戦い続ける同胞があるうちは、恭順したとしても仕えることは考えられないというのが本音であつただろう。

彼らが本格的に新政府に出仕するのは明治二(一八六九)年に箱館戦争が終結してからのことである。十月、政府は静岡藩を通じて洪沢栄一に出仕を求めた。六月には版籍奉還が行われていたから、制度上は土地と住民は天皇のもとに戻っていた。しかし新政府は慎重に、静岡藩を経由して勧誘した。同藩は、出仕を拒んで新政府の不興を買わないよう言葉を添えて洪沢を説いた。もはや逆らう術も義理もない。大蔵省に入った洪沢は、新しい制度を作り上げるためには有能な人材が不足しているとして、旧幕臣の積極的な登用を建言する。その斡旋により、前



五箇条の御誓文。由利公正や木戸孝允などによって起草され、慶応4(1868)年3月14日に明治政府によって発せられた。掲載資料は、「五箇条の御誓文」および同日の儀式の記録を後日に収録した文書(所蔵・国立公文書館)



平田東助。嘉永2(1849)年～大正14(1925)年。
出羽国米沢藩。大学南校卒業後はドイツ留学を経て、
大蔵省・法制局などで活躍。ドイツ法学の専門家として、
大日本帝国憲法制定や内閣制度の整備に尽力した。
帝国議会発足時は貴族院議員に勅選される。
山縣有朋の知遇を得て、法制局長官、農商務大臣、
内務大臣、内大臣などを歴任した。
写真は明治23(1890)年帝国議会開院式当時のもの
(『伯爵平田東助伝』昭和2年所収)。

島密(開成所教授。のち内務省駅運總監。郵便の父)、赤松則良(咸臨丸で渡米、オランダ留学。のち海軍中將。造船の父)、杉浦讓(フランス渡航、外国奉行組頭。のち内務省地理局長)など錚々たる面々が続々と集められた(樋口雄彦『田幕臣の明治維新』吉川弘文館)。

実のところ、わずか七十万石に押し込められた田幕臣たちの生活は厳しかった。戊辰戦争も終結しており、瘦せ我慢も潮時であった。なにより、自らの才能を中央で再び活かせるのである。心が躍らないはずもない。

彼らは新しい時代をどう感じたのだろうか。民部省に入った前島密は、静岡藩では幹部であったが、新政府では九等出仕とされ、待遇に不平を漏らしていた。しかし、その不満は初めて出

席した省議で忤拭される。自分は局内の上席であり、田幕臣で自分より地位が高いのは漢沢だけであった。

そしてなにより省卿(長官)である伊達宗城(田字和島藩主)、幹部の大隈重信、伊藤博文が、みな身分の差を気にせず、自由闊達に議論を交わしていた。身分制のなかで生きてきた前島には思いもつかない、新しい世が目の前にあった。

開かれた 人材育成の道

統治を継続する必要性から田幕臣が厚遇されたのに対して、抗戦を続けた奥羽越列藩同盟に加わった人々には不遇の日々を過ごすこととなった。軍人を別にすれば、明治前期の新政府に、こ

れらの地のめばしい人材を見出すことはできない。

彼らにとつての光明は、新政府が人材育成の道を広く開いたことであった。もつとも、それは賊軍の地に生まれた青年が切り開いたものであった。のちに山縣有朋(長州)の右腕として知られる旧米沢藩士、平田東助である。

米沢藩は戊辰戦争に敗れたのち、藩政改革と洋学の奨励に活路を見出していた。藩校の秀才として知られた平田は、その先駆けとして大学南校(開成所の後身)に送り出された。同校は藩閥の子弟で占められていたが、刻苦勉勵する平田に分け隔てなく接する学生がいた。日向飢肥藩の小倉処平である。

賊軍出身の平田と小藩出身の小倉は、藩閥ばかりが優遇されている大学南校の現状では、「各其志を遂げ」るべきとする御誓文の趣旨が達せられないと批判した。これでは門戸を広く取つていた江戸の昌平坂学問所より後退している(前田勉『江戸の読書』平凡社)。彼らは学問の機会均等を主張して、全国各藩から遍く人材を集めるべきと意見書を提出した。これは政府の容れるところとなった。

最高学府の門戸は開かれた。このうち、司法省法学学校をはじめ各種学校が設立され、明治十九(一八八六)年にはそれらを整備統合して帝国大学が発足

する。官軍の子であれ、賊軍の子であれ、勉学に励み、試験に通過すれば官途が開けることとなった。二十三年に発布された大日本帝国憲法は、「日本国民は法律や命令の定める資格に応じ、等しく文官、武官、その他の公務に就くことができる」(第十九条)と宣言した。起草者である伊藤は、これを「維新改革の美果」と高唱した(清水唯一朗『近代日本の官僚』中央公論新社)。

このことは東京のすがたをも変える。神田界隈には多くの学校が作られ、全国から集まった学生たちで活気を呈した。彼らはコーヒーを飲み、店を見て回り、談論風発、ときにはワインを飲み干して帰った。本郷周辺には出身藩ごとの学寮が建てられ、学生たちは出身地の名譽を背負って切磋琢磨した。自ら学ぶ者だけが救われる。『学問のすゝめ』でそう唱えたのは幕臣として身を立てた福澤諭吉であったが、縁故のない賊軍の子弟は自らの道を拓くためにひたすら学んだ。それが制度の支えを受けて花開くこととなる。

賊軍の地に生まれ、 日本を変えた三人

学んで道を拓いた者たちは、明治という開かれた時代のなかで頭角を現し、官僚を超えて政治家となった。遂には大臣として日本を創った三人を見

てみよう。

幕末、幕府御用絵師の家に生まれ、
ほとんど仙台藩士の養子となった高橋
是清の人生はまさに自ら拓いたもので
あった。横浜のヘボン塾に学んだ高橋
は、藩命によりアメリカに留学する。
しかし、資金を着服されたうえに丁稚
奉公に売られ、一年間をオーークランド
で過ごす。

「ダルマ」は簡単には転ばない。なん
とか帰国すると、サバイバル英語を武
器に教師となり、文部省を皮切りに各
種学校で教えた。列国との間で知的財
産権が問題となると、特許局の初代局
長として敏腕を振るった。その後もペ
ルーで鉱山事業に投資して詐欺に遭
うと、今度は日本銀行に活躍の場を得
て再起する。副総裁として日露戦争の
戦費調達に奔走し、日銀総裁を経て、
大正二（一九一三）年、大蔵大臣に就任
する。賊軍の地から初めての蔵相であ
った。

同じ仙台藩の一門、水沢に生まれた
後藤新平は、その強い気性と高い専門
性によって立身出世を遂げていった。
同地に赴任した安場保和（熊本）に見
出され、その斡旋で医学を学び、安場
が愛知県知事となると愛知医学学校に転
じて校長となった。このとき、岐阜で
遭難した板垣退助（土佐）の診察に走
ったエピソードはよく知られている。

その後、衛生行政の専門官僚として累
進した。

後藤も一度、失職の憂き目に遭って
いる。しかし、日清戦争の復員検疫を
通じて長州の児玉源太郎に認められ、
児玉の台湾総督赴任に伴って民政長官
として日本初の本格的な植民地行政を
担った。その後、南満州鉄道の初代総
裁を経て、第二次桂内閣の通信大臣、
鉄道院総裁となる。

極めつけは原敬であろう。盛岡藩の
上級武士の次男に生まれた原は、十二
歳のときに戊辰戦争での敗戦に遭う。
藩営の学校に通う学資すら尽きたのち
は刻苦勉励し、カトリック系の神学校
を経て司法省法学校に入学するが、こ
も校長と対立して長続きせず、新聞
業界に転じた。そこで井上馨（長州）、

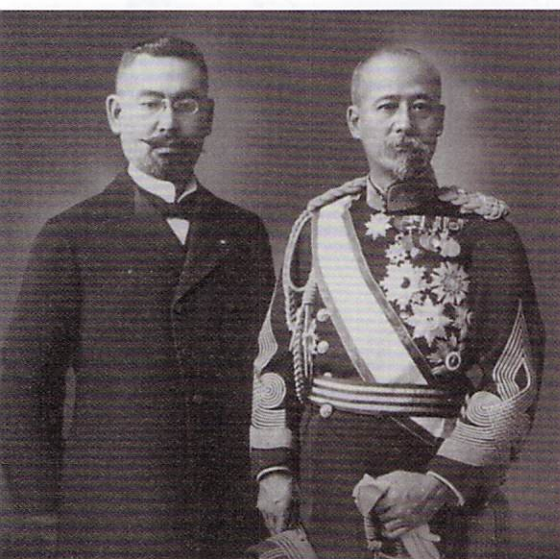
ついで陸奥宗光（紀州）に認められ、農
商務省と外務省の改革に辣腕を振るう。

ほとんどして原は政界に転じる。陸
奥に、賊軍出身者が官界にいてもせい
ぜい次官止まりと言われたことが大き
かったという。再び新聞業界を経て、
明治三十三（一九〇〇）年、伊藤博文に
従い、立憲政友会の創設に参加し、衆
議院に議席を得る。その後、多くの官
僚出身者が同党を見限っていくなか、
原は留まり、西園寺公望（公家）内閣で
二度にわたって内務大臣を務める。
そして大正七（一九一八）年九月、原
敬内閣が発足する。明治維新から五十
年、ついに賊軍の地から首相が誕生し
たのである。高橋は蔵相となり、後藤
は東京市を任された。「賊軍は次官ま
で」という時代は終わりを告げた。

勝者である藩閥の子弟は、官僚登用
試験に際して大きなブレッツシャーに晒
されたという。周囲は合格して当然と
見る。しかし、試験は公平にして峻厳
である。地元の期待は高い。彼らは想
像を絶する緊張を強いられた。

勝者であることが僥倖をもたらすの
だろうか。敗者であることが努力を導
くのだろうか。この国の近代化が曲が
りなりにも「成功」したのは、勝者に
も敗者にも門戸を開き、両者を競わせ
続けたからだろう。

原は述懐する。「戊辰戦役は政見の
異同のみ、当時勝てば官軍負ければ賊
軍との俗謡あり、其の真相を語るもの
なり、今や国民聖明の澤に浴し、此事
実天下に明かなり。諸氏以て瞑すべし
と。」



上・台湾時代の後藤新平（左）と児玉源太郎。
後藤は帰国後に貴族院議員に勅選された。
（鶴見祐輔『後藤新平』第3巻所収）
下・外務次官時代の原敬。明治28～29年頃の写真。
この後、立憲政友会の結党に参画し、
肥前出身の松田正久とともに総裁の西園寺を支えた。
「我田引鉄」とも呼ばれた積極的な
地方政策を駆使して、政友会の党勢拡大に尽力した
（提供・原敬記念館）

